顕彰芭蕉翁

第102号　令和8年3月

阿蘭陀(おらんだ)も
花に来にけり
馬に鞍
芭蕉

名品解説　横山清暉筆 芭蕉翁と蛙図

横山清暉筆 芭蕉翁と蛙図

横山清暉（一七九二～一八六四）が描いた芭蕉と蛙の絵です。清暉は、江戸時代末に活躍した四条派の絵師で、松村呉春に師事しました。呉春は、与謝蕪村の弟子で、「月渓」の名で俳諧にも親しみ、芭蕉の肖像画も多く手がけました。本作品の芭蕉は、呉春の描いた芭蕉像によく似ています。右下に蛙が描かれていることから、発句は添えられていませんが、「古池や蛙飛こむ水のおと」をふまえていることは明白です。

和歌の世界では、蛙は古来よりその鳴き声が賞美されてきました。その伝統を継承しながらも、「飛こむ蛙」という俳諧ならではの新しい蛙を詠んだのが芭蕉の「古池や」句でした。この句は、芭蕉生前には特別視される句ではありませんでしたが、芭蕉没後、弟子の支考らの喧伝によりしだいに芭蕉の代表句とみなされるようになりました。そして、それに伴い夥(おびただ)しい数の「古池や」句を賛とした芭蕉像が作られました。

そうした芭蕉像のなかで、本作品は「古池や」句を賛として添えることなく、絵だけで表現しているところに新しさと面白さがあります。また、よく見ると蛙が吐いた煙のなかから芭蕉があらわれているように見えます。そうすると、この蛙は妖術使いの蝦蟇(がま)でしょうか。当時流行していた、蝦蟇の妖術を使って悪を懲らしめる自来也(じらいや)の物語などの影響がうかがえ、この点でも面白い作品です。

なお、本作品は、現在開催中の芭蕉翁記念館 春の企画展「「古池のかわず」はどこへ行ったか?」（令和八年六月七日まで）にてご覧いただけます。

（伊賀市文化振興課学芸員　服部温子）

巻頭句解説

延宝７年（1679）以前に江戸で詠まれた句です。阿蘭陀(おらんだ)とは、毎年春になると、将軍へ挨拶にやってくる長崎出島のオランダ商館長のことです。謡曲「鞍馬天狗」の一節「花咲かば告げんと言ひし山里の、使は来たり馬に鞍」をふまえ、「花の使」ならぬ「オランダ人の使」が、馬に鞍を置いてやってきたというのです。オランダ人までやってくる、花盛りの江戸を讃美した一句です。

顕彰芭蕉翁　第102号
編集・発行／公益財団法人　芭蕉翁顕彰会／〒518-0873　三重県伊賀市上野丸之内117の13／電話0595・21・4081